

濃く甘く、湯加減に出た、重い露を、舌の先へ一  
しずくずつ落して味つて見るのは閑人適意の韻事  
である。普通の人は茶を飲むものと心得ているが、  
あれは間違だ。舌頭へぼたりと載せて、清いものが



四方へ散れば咽喉へ下るべき液はほとんどない。ただ馥郁たる匂が食  
道から胃のなかへ沁み渡るのみである。夏目漱石「草枕」より

**玉露** 茶樹に長く覆いをして、柔らかく緑色の鮮やかな葉に育てる。摘んだ新芽はごく短い時間だけ蒸して、緩やかにもんで仕上げる。味は緑茶の中でも渋みが最も少なく、うまみの元であるアミノ酸をたくさん含んでいる。

(篆刻家 河野晶苑 遺作展にて)

平成十九年十一月

日本煎茶道研究会 飯田 香雪